

傷痕と出会いの隔時性 ——呼びかけの痕跡と他者の現れをめぐる事例から——

澤田 唯人

1. はじめに

だれかのからだの傷痕に触れる——そのとき、わたしは「何に」触れているのだろう。

本稿の目的は、このささいな、けれどもそうすることがどこか他者と出会おうとするひとりの身ぶりのようにもみえる行為への問いを起点に、他者の現れを再考することにある。

たんに手や鼻や頬などに触れる経験であれば、「あなたのからだに」あるいは、より直截に「あなたに」触れているのだといいうるかもしれない(伊藤 2020)。この場合おそらくそこには、私たちの社会的なコミュニケーションを支えている見えざる「相互身体的な」調律や同調(癒合的な間身体的地層での社会性)も働きうることだろう(e.g. ダンス、音楽)(Merleau-Ponty 1945=1974)。

だが、だれかのからだの傷痕を、それとして触れているとき、そこでは間身体的レベルでの社会性(共時性)のようなものは拒まれており、その拒みがむしろ「何に」触れているかのわからなさとして経験されているようでもある。その限りでは、他者とは、私の目前に現れていながら、「ここにはいない」のかもしれない。

傷痕にそうしたある種の他者の不在をうけとる手は、しかしそれでも「何か」に出会おうとのぼされるように思われる。わたし自身、大切な人のからだの傷痕にいまも触れることがあるし、自傷行為をめぐるインタビュー調査のなかで、差し出され(そうすることがゆるされるなかで)、その傷痕に手を触れさせてもらうこともあった(澤田 2020: 271)。自分が「何に」触れているのか、「なぜ」そうするのかもよくわからず、しかしそうすることに何か応答的な必然性があるようにも感じられていた。

ある学生は授業の感想で次のように記している。

すでに付き合っていて、……でもはじめて、恋人に出会えたように感じたのは、恋人のその足のやけどの痕にふれた時だった。彼は全然気にしてなかったけど、自分がそうしているのが、印象深かったできごとです¹。

もちろん、たんに「傷痕がある」という相手の意外な一面を知ったことや傷痕に触れさせ

¹ 慶應義塾大学文学部で「出会いと別れ」をテーマにした社会学の授業での学生の感想である。ほかの学生の感想には、たとえば「いくらセックスをしても、彼と出会えていないと思えなかった」、「18年間一緒にいても、私はお母さんと出会えてなかったように思う」、などがある。

でもらえる関係になれたという変化それ自体が、この学生の出会いの感覚を構成したと考えることもできる。だが、しばしば出会いの感覚が問われるのは、私たちがたんに他者への現在のな——いまここの——志向的な作用をただ強めれば、つまり「対面」し、「会話」をし、ただ「時間」を長く一緒にすごせば、あるいは相手の「情報」を多く知り、相手の身体と「接触」すれば、自動的にその経験に至るわけではないという点にある。この学生の経験をもう詳しく知ることはできないが、大切な人の傷痕に触れるということのうちに他者と出会うという経験の、ひとつのモメントが存在しうることを物語っているように思われる。

しかし、傷痕に触れようとのぼされ、他者におもむく手は、あるいはわたしは「何に」触れようとしているのか。そしてときに、ただそうすることがそのまま他者と出会おうとする身ぶりとして生きられるように思われるのはなぜなのか。以下では、こうした他者との出会いのリアリティがどのような経験構造のもとにあるのか、いくつかの傷痕や痕跡をめぐる事例から考えてみたい。

2. 傷痕と痕跡——その異同のために

傷痕に関する先行研究は、その持ち主の経験からのものは多数あるものの、他者の傷痕に触れるという方向性の研究は管見の限りみあたらない。そのため、本節では傷痕の持ち主にとってそれがどのような現れにあるのかを一瞥したうえで、傷痕を包摂する概念である「痕跡」をめぐる経験的研究を補助線に、そこに触れる経験と他者の現れを考えてみたい。

(1) 乳房切除の傷痕を生きる——「窓」と「物質性」

J. スラットマンは、傷痕を「あなたが誰であるかを物語る〈秘密のアルファベット〉の文字」²とし、「自分の身体に起こった何かの痕跡」であり、「それゆえ過去の何かを指しているが」、同時に「傷痕はまた、身体の現在の意味を具現化するものでもある」と述べる (Slatman 2016: 348)。その事例として、乳がんによる乳房全摘出手術を受けた女性アンが、その傷痕に、喪失——「不在の」乳房——を見ていた語りから、傷痕を他者と共有するなかで、ただの物質性のうちにそれを経験するようになった変化をあげて、次のように述べている。

傷の存在論的な意味は……記号の存在論的地位に関連している。記号が何かを意味する場合、記号は実際には、それ自体で見える何かとしてではなく、「それが意味するものを私たちが見るための窓」(Lévinas 1982: 21) として知覚される。実際……、小説を読んでいるとき、私たちは物語の光景へと導かれている。それに対して、本の中の文字という物質的な与件だけに固執していたら、物語の意味はつかめないだろう。……これをアンの経験に当てはめると、彼女が傷痕についてまだ言及

² この言葉は、小説家 P. オースターの自叙伝『冬の日誌』(Auster 2012=2017) から引かれている。

していたのに、乳房の不在に言及しなくなった瞬間に、傷痕に与えられた物質性を超えた意味を帰属させることに断絶が生じたといえるだろう。E. レヴィナスの比喩を使えば、傷痕は、アンが不在の乳房を覗き込むための窓であることを止めたと言えるかもしれない。……もはや傷痕を通して見るのではなく、ただそれを見て、彼女が依然として言及しているのは傷痕自身の目に見える外観、その物質性であるという言葉で説明できるだろう。(Slatman 2016: 358)

傷痕は当初、「それが意味するものを見る窓」として、アンに「不在の」乳房をみせていたが、彼女が「傷痕に慣れることに成功したとすれば、それは傷痕が消えたり、存在しなくなったりしたからではなく」、むしろ、「傷痕がその意味作用の一部を失ったから」だ。「アンにとって消えたのは、傷痕ではなく、〈不在の乳房〉である」(Slatman 2016: 359)。

傷痕が「窓」から「物質性」へと移行する経験は、たとえばアンのそばにいる他者たちにとっても、その質に違いはあれど経験されるだろう。実際、アンは「(夫と一緒に) わざと傷痕を見たり触ったりしながら、傷痕に慣れ親しんできた」という(Slatman 2016: 360)。だがその一方で、(傷痕の持ち主ではなく) 他者にとってはその相手の傷痕に慣れて「不在の乳房」が消失することは、それが持ち主が経験するのと同じような現在の物質性——「いまここ」に還元可能な身体の一部——として現れることを意味するだろうか。

スラットマンの議論が逆説的に問いかけるのは、私たちにとって他者の身体(の一部)が傷痕として現れる条件である。他者の身体の任意の箇所が傷痕として知覚される時、私たちは確かにそこに《もう直接的には触れられない不在の何か》(具体的な内容)を「窓」を通じてみる場合もあるが、たとえ内容が消失した後も、それが傷痕として知覚されるのであれば、それは依然、現在ではない「時間」を示す「窓」であり続ける。私たちはそこに消えない時間そのものをみているように思われる。

だとすれば、他者のからだの傷痕に触れるとき、私は消えない時間に触れている、あるいは私と他者との時間の隔たりに触れている。あえてことばを与えるなら、そうなるだろうか。私と他者との共時的な時間——「いまここ」の時間——とは異なる時間が、しかし「いまここ」の他者に露出しているといえればいいだろうか。そのような他者の身体における時間の形象を、私たちは傷痕として知覚する。だから傷痕は、一面ではいまこの私がそれに触れるという共時化の身ぶりを拒むものとしてもあり、むしろ私の時間のほうが揺れ動くようなためらいがある。しかし、なぜそのような他者の傷痕に触れることが、他者と出会おうとする身ぶりとなって生きられうるのだろうか。「窓」の向こうには誰がいるのだろうか。

(2) 痕跡に触れる——「密着的不在」と「着信的不在」

他者の身体ではなく、世界内の事物にのこされた痕跡もまた時間的な隔たりとしての「窓」としてある。そこに触れることで「かつてはあった(いた)」が、いまは《もう直接的には触れられない》「不在の」誰かがありありと現れうるからだ。小松美彦は、痕跡を通じて他

者が「厳に現れながら不在」である形式を「密着的不在」（小松 1996: 209）と呼ぶ³。

それはたとえば、親しい人を突然の出来事で失った場合に起こる。阪神・淡路大震災で 14 歳の娘の百合さんを一瞬にして失った母親、中北富代さんは、娘がいなくなったあとでも、「街のたたずまいの中に娘がまだ息づいている」という感覚を語る。インタビュアーの男性と、娘の通った幼稚園を訪れたときのことを、彼女はこう語る（森岡 2001: 77）。

本人はもういないのに

あの子の触ったもの、書いたもの。そんなものが残っている。

百合はもういないけど、でも、それがあるというのがものすごく不思議というか。

こういうものを見るのは、すごく、なんというか……。

いままであの子が触ったもの、書いたものが、息づいている。

（河村・中北 1999: 92）

小松によれば、こうした密着的不在——「すでにいないはずの人が、いまここに現れている」という感覚——は「その者への極限的な近さとともにとてつもない遠さを瞬時のうちに体験し、そのあいだを揺り揺られる」こととしてある（小松 1999: 209）。痕跡という「窓」の向こうにその姿はみえるが、しかし手は届かない。それでも触れようとのばされる手は、私たちが他者の傷痕に触れ、出会おうとする手とどこか似ている。もちろん、前者はその共時化可能性が絶たれている。それでも、ふたつの手が似ているとすれば、いずれもが、触れようとする他者の姿を、「時を隔てた」ところに探そうとする身ぶりにみえることである。少なくとも痕跡は、不在の他者との再会をもとめ探す人へのみ、呼びかけ、「窓」をひらく。傷痕の場合、探された人は目の前に生きている。では誰が探されているのだろうか。

この点を考えるまえに、いまひとつ、痕跡をめぐる論点として、先の密着的不在とは異なる様相を考えておこう。痕跡の特徴は、一方で「もうそこには（い）ない」という不可逆的な過ぎ去り、すなわち絶対的な時間の隔たりを意味しながら、「まだそこにある（いる）」というかたちで過ぎ去らないひとやものを浮上させる「窓」にあった。この「窓」は、しかしそれゆえ私と不在の他者とを時間的に隔てながら、こちら（私）からの応答責任を触発し続ける回路になる。時を隔てているため、向こう（不在の他者）からの呼びかけがみえたり、聴こえたりするわけではない。その呼びかけは私自身に憑りつくように「着信」し、私が鳴り響くような感情として訪れるように思われる。たとえば、生前に交わした約束（「〇〇に旅行しよう」「うん」）は、その相手が亡くなったあとにも私自身に応答を触発する呼びかけとして感情的にこだまする。一般的にはたんに果たせなかった後悔として記述されるが、実際に亡き人との約束に応えようとする限りでは、そこには痕跡を通じた時を隔てた呼びか

³ この小松による「密着的不在」は、後述する脳死状態の患者を看取る家族にとっての他者（患者）の現れをめぐる論じられたものだが、ブルースト『失われた時を求めて』の中のエピソードが参照されており、不在の他者をめぐる痕跡との関連でここでは論じる。

け)と〈応答〉がある。そうでなければ、なぜ相手の死にもかかわらず、その約束が無効とならず、むしろ相手の死後にこそ強く応答がもとめられるのか説明できないだろう。

こうした亡き人からの「着信」への応答は、しかしときに終わりのみえないものにもなりうる。皮膚が赤剥け血がでるほど手を洗い続ける洗浄強迫(強迫性障害)を生きる漫画家のみやぎき明日香さんは、その発症のきっかけに至るまでの経緯を次のように語り、描いている(以下に、その語りを漫画から文章のみで抜き出すかたちと、そこに続く漫画のシーンを交互に引用し示していく)。

中学1年のとき、たまたま入ったお好み焼き(もんじゃ)屋で、初めて食べ物を汚いと思った。入院している父の見舞いに行った帰りだった。胃ガンだった父はいつも胃液のようなものを吐いていて、胃を切除していたからか、父のトイレのあとにはひどいにおいがしていた。私は父をとて汚いと思っていた(見舞いに行きたくないし、家に来てほしくない)。父の容体が悪くなると呼び出しがかかるので、学校のチャイムが怖かった。いつも父の体調にビクついていた(校外学習、楽しみやけど、行けるかな…。もし病院に呼び出されたら…。)。私が中学2年の秋に父は死んだ。正直な話、もう汚いものを見なくていいんや…とホッとしたのであった。



35 第2章 発症と悪化のきっかけ

でも私は父が一番苦しんでいるとき、「汚い」と避けた。謝りたかったけど、父はもういなかった。父の病室にはゲーム雑誌が置いてあった。飲食はできず、痛み、苦し、死を恐れながら、ゲームで時間を潰す。そんな生活を想像してゾッとした。



37 第2章 発症と悪化のきっかけ

(みやざき 2018: 33-7)

その死後に「窓」の向こうにみえた優しくった父の面影。それをきっかけとして、生前の父を《汚い》と避けたことに、時を隔てて〈応答〉したい——謝りたい——けどできない後悔と不安がみやざきさんにくり返し着信する。

だが、父に「謝罪する」という合理的で共時的な応答方法は、もう不可能となってしまった。だから、この亡き他者への時を隔てた〈応答〉は、行き場なく切迫し続ける後悔と不安を、異なりながらも類似する「いまここ」の文脈へとなぞらえることでふりはらう試みとなる。つまり、《汚い》と思って避けたことへの不安や後悔が「手を洗うと」流れ落ちるかのように、その意味階層を比喩的にずらして生きるほかに着信を止める術が見出せない。それは、本来の合理的で共時的な応答ではないという意味では、どこか「魔術的な」(Sartre 1939=2000: 160)、しかし、時を隔てた切実な「祈り」のような身ぶりでもある。

だが、それは根本的な解決にはいたらない。図1のようにすれ違い続けるからである。

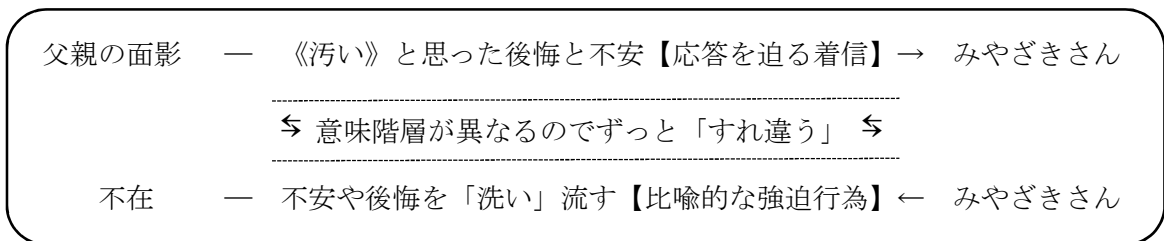


図1 着信する呼びかけと応答行為

みやざきさんの発症のきっかけが問いかけるのは、痕跡という「窓」を介しておこる〈呼

びかけ) がその時間構造上の取り返しのつかなさゆえに、応答を「強迫」するという側面がある。過ぎ去ったはずのものが過ぎ去らずに(こびりつき)、くり返し回帰することを「外傷」と呼ぶのであれば、死者からの鳴り止まない着信もそうなのである。

こうした痕跡がもつ「窓」としての動向は、しかし、私たちが手を触れようとする他者の傷痕の現れにも妥当するだろうか。確かに、他者のからだの傷痕という「窓」の場合も、(目の前にその人は生きているにもかかわらず)誰かを探そうとするかのように、時を超えようとするかのように思わず手をのびし触れようとしてしまうという意味では、時を隔てた誰かに〈呼びかけ〉られ、〈応えて〉いるようにもみえる。けれどもそうするのは、たとえばその傷痕が決して私の過去の過失や加害によって生じたための取り返しのつかなさからではない。問題は、記憶された罪の意識や後悔などないのに、たとえば私と知り合う以前の傷痕であるのに、それが私に物質性を超えた「窓」としてひらくと、少なからず取り返しのつかない何かを私に〈呼びかけ〉ているように思え、〈応答〉してしまうということのほうにある。「窓」の向こうにいる誰かと目だけはあっているかのように。なぜだろうか。

3. 「そこに人がいる」ということ

傷痕という時を隔てた「窓」の向こうには誰がいるのか。その消息をたどるために、私たちは痕跡をめぐる「見知らぬ」他者との出会いの経験を考える必要がある。

(1) 幽霊の他者——見知らぬ死者を乗せたタクシードライバーたち

ここまで確認してきたように、痕跡という「窓」では、密着的不在——もういないはずのひとが現れる——という事態と、着信的不在——もういないはずのひととの時を隔てた〈呼びかけ〉と〈応答〉——という事態が起こりうる。そうであれば、たとえば過酷な被災を経験した「土地」には、そうでない地域とは明らかに異なる、あの世とこの世の〈はざま〉(巨大な痕跡＝「窓」)がひらかれ、さまざまなかたちで死者たちが現れることもまた不思議なことではないように思われる。

被災地では、「呼び返せない世界」に去って行った肉親や知人たちとの再会こそが待ち望まれていたのである。人々は夢のなかで懐かしい人に出会い、また、かすかな気配や、ときには幽霊という姿をもって現れた死せる人々の訪れを体験していた。津波による突然の別れは、死者とともに生きてあった人々の周囲に、取り返しのつかぬ悔恨を無数に産み落とした。(河合・赤坂 2014: 220)

実際、東日本大震災以降、宮城県石巻市など深刻な津波被害のあった地域(巨大な被災の痕跡＝「窓」がひらかれたような土地)では、出会われたときにはそうだと気づかないまま、(幽)霊を乗せたというタクシードライバーの証言が相次いだ。

東北学院大学の金菱清ゼミナールの学生たちの聞き取り調査によれば、タクシードライバーたちの体験は、「幽霊かもしれない」や「そのほうがつじつまが合う」「そのほうが心が救われる」というような曖昧なものではない。ドライバーたちは自らの体験をはっきり幽霊現象として認知しており、かつその対象と「いまここ」の共時的な水準においても対話や接触をしていることから、不確かな現象としては体験していない⁴。

ここでは、2人のタクシードライバーの語りを、金菱ゼミの工藤優花による記述とともに引用する。1人目はインタビュー当時49歳の男性で、震災で身内は亡くなっていない。

「巡回をしてたら、真冬の格好の女の子をみつけてね」。13年の8月くらいの深夜、タクシー回送中に手を上げている人を発見し、タクシーを歩道につけると、小さな小学生くらいの女の子が季節外れのコート、帽子、マフラー、ブーツなどを着て立っていた。時間も深夜だったので、とても不審に思い、「お嬢さん、お母さんとお父さんは？」と尋ねると、「ひとりぼっちなの」と女の子は返答をしてきたとのこと。迷子なのだと思います、家まで送ってあげようと家の場所を尋ねると、答えてきたのでその付近まで乗せていくと、「おじちゃんありがとう」と言ってタクシーを降りたと思ったら、その瞬間に姿を消した。確かに会話をし、女の子が降りる時も手を取ってあげて触れたのに、突如消えるようにスーッと姿を消した。明らかに人間だったので、恐怖というか驚きと不思議でいっぱいだったそうである。「噂では、他のタクシードライバーでもそっくりな体験をした人がいるみたいでね、その不思議はもうなんてことなくて、今ではお母さんとお父さんに会いに来たんだろうな～って思ってる。私だけの秘密だよ」。その表情はどこか悲しげで、でもそれでいて、確かに嬉しそうだった。(金菱 2016: 6-7)

2人目はインタビュー当時57歳の男性で、震災で母親を亡くしている。

14年6月のある日の正午、タクシー回送中に手を挙げている人を発見してタクシーをとめると、マスクをした男性が乗車してきて、服装や声から青年といった年恰好だったとのこと。「でもねえ、格好が何でかね、冬の格好だったんだよ」。その青年は、真冬のダッフルコートに身を包んでいたらしい。ドライバーは目的地を尋ねると、「彼女は元気だろうか？」と応えてきたので、知り合いだったかなと思い、「どこかでお会いしたことありましたっけ？」と聞き返すと、「彼女は……」と言い、気づくと姿はなく、男性が座っていたところには、リボンが付いた小さな箱が

⁴ 実際、このときタクシーは乗客を乗せた時点で“空車”から“実車”や“割増”に切り替えてメーターが切られ、燃料も減っており、またGPSが備えられ、無線でも連絡を取り合うため、はっきりとした証拠が残っている（夢ではない）。ほかにもメモや書類も残っており、事実「無賃乗車」という扱いで処理されている（金菱 2016: 9-10）。

置かれてあった。ドライバーは未だにその箱を開けることなく、彼女へのプレゼントだと思われるそれを、常にタクシー内で保管しているそうだ。「ちょっとした噂では聞いていたし、その時は“まあ、あってもおかしいことではない”と、“震災があったしなあ”と思っていたけど、実際に自分が身をもってこの体験をするとは思っていなかったよ。さすがに驚いた。それでも、これからも手を挙げてタクシーを待っている人がいたら乗せるし、たとえまた同じようなことがあっても、途中で降ろしたりなんてことはしないよ」とのことであった。そして、いつかプレゼントを返してあげたいそうだ。(金菱 2016: 7-8)

いずれのドライバーも、その体験に驚きつつも、「不思議なんてことはない」「あってもおかしいことではない」と語り、女の子や青年をタクシーに乗せることができたことをどこかほこらしく、嬉しそうでもある。そしてふたりのその後を気にかけている。こうした経験が、他者の「現れ」を超えて、他者との「出会い」の経験に近いとすれば、それはなぜだろうか。

こうした「出会い」の感覚への問いを念頭に置きつつも、私たちはタクシードライバーの経験から、さしあたり他者の「現れ」についてふたつのことを問いかけているように思われる。ひとつは、(前節でみた) 痕跡という「窓」がもつ密着的不在と着信的不在が、基本的には亡き人との再会をもとめる家族などの大切なひととのあいだにひらかれたのに対し、タクシードライバーたちが被災地で乗せた(幽)霊たちは、ドライバーたちの家族でもなければ知り合いでもなかったという点である。だとすれば、なぜタクシードライバーという職業の人たちがとりわけ、(幽)霊の現れに遭遇し、交流することになったのだろうか。あるいは逆にいえば、なぜ(幽)霊たちは、バスや電車という移動手段ではなく、あえてタクシーを選び、乗車したのだろうか。何が、他者の現れを可能にしたのだろうか。

おそらくそれは、タクシードライバーたちが、地元石巻で震災前から「道半ば」にある人に乗せ、(バス停や電車の駅ではなく)もとめられた「目的地」まで送り届ける仕事をしているということに関わる。津波によって亡くなった人たちもまた「道半ば」で突然命を奪われ、いまもまだ「どこかに」「誰かのもとに」行きたくて被災地という巨大な痕跡＝「窓」に佇んでいること、その〈呼び声(呼びかけ)〉に応答する責任が、ほかならぬタクシードライバーたちの生業の実践の中に構えとして組み込まれていたのだといえるだろう。その限りでは、(幽)霊として現れた他者との共時的な「呼びかけ」と「応答」に先行するかたちで、痕跡をめぐる隔時的な〈呼びかけ〉への〈応答〉が働いているのだといえるだろう。

タクシードライバーはその仕事柄、地元石巻市出身者が多い。そして、いつでもお客さんが要望する目的地に向かって行けるように、さまざまな道に精通していなければならない。すなわち、故郷で働き、故郷に精通し、故郷に貢献する、大いに地元密着型の職業である。……人と人、人と場所、人と(場所を超えた)物とをつなぐ有機的な役割を、地元石巻で担っている。タクシーに乗りあの人に会いに行く。

タクシーに乗りあの場所へ行く。タクシードライバーたちの幽霊現象は、日常の延長線上で人（ドライバー自身）と霊魂をつないでいるのである。（金菱 2016: 14）

おそらく（幽）霊たちは、だれにでも〈呼びかけ〉、現れるわけではない。被災地という巨大な痕跡のうえに、そこにいるかもしれないひとの気配や声なき〈呼びかけ〉を聴こうとするひと、それを探し、その願いに応答しようとするひとにだけ「窓」はひらかれ、そのまえに現れる。（幽）霊が電車やバスではなく、タクシーを選んで乗車する必然性もここにあるように思われる。そうであれば、私たちが共時的な水準でおこなっているように、まず「呼びかけ」があって、次にそれに自覚的に「応答する」というのではない。〈呼びかけ〉は、隔時的であるがゆえに、そもそも意識の現在には通常の意味では見えも、聴こえもしない。非意識的な水準で応答しようとするなかで〈呼びかけ〉が聴こえる。あるいは応答しようとしていること、それが事後的に〈呼びかけ〉られていたということの意味する。応答しようとしている自己に反省的に気づいたとき、〈呼びかけ〉があったように思える。その限りでは、私の意識は〈呼びかけ〉にいつも遅れている。タクシードライバーたちの経験はそうした隔時的な〈呼びかけ〉と〈応答〉との関係が、通常考えられる共時的な水準での順序と逆転していることを物語ってもいるように思われる⁵。

私たちに問いかけるいまひとつの点は、タクシードライバーたちにとって、乗客が不意に姿を消してしまうそのときまでは——不審な点は事後的にふり返ればあるものの——、その人を（幽）霊だとは思っていなかったという意味で、それは生きている「他者」として現れ、経験されていたことに関わる。このことは逆説的に、他者とは何か（ある現れが他者として経験される条件とは何か）ということ問いかけている。姿を消すまでは生きている他者として現れていたのであれば、実際に生きているのか亡くなっているのかは、「他者」としての現れの経験に決定的ではないということである。その限りでは、幽霊は他者でありえ、他者は幽霊でありうる。タクシードライバーたちの経験は実際そうであったのだから。

そうであれば、生者であれ、死者であれ、幽霊であれ、ある現れが「他者」として経験される条件とは、時を隔てた〈呼びかけ〉を感受するということにはかならない。実際、私たちは日常的にも、こうした〈呼びかけ〉を幽霊的に経験している。たとえば、なんらかの物音、気配、視線などを感じて振り向くと、誰かがいることもあるし、誰もいないこともある。しかし、振り向くまでは〈呼びかけ〉られたというその意味では「他者」は現れていたのだ。他者とは〈呼びかけ〉である。私（意識）がいつもそれに追いつけない〈呼びかけ〉である。そこにはその痕跡しか見いだせない〈呼びかけ〉である。

「他者とは〈呼びかけ〉である」、というこのシンプルな命題においては、したがって生

⁵ 私の非意識的な応答性のなかで〈呼びかけ〉られるという構造上、それは私の現在において明確に意識化されることがないかたちで聴かれている。むしろ明晰な現在の意識に還元的に捉えられてしまえば、隔時的な「窓」は剥き出しのただの「物質性」へと姿をかえてしまい、〈呼びかけ〉は消え、それに由来していた見知らぬ（幽）霊としての他者も現れる余地を失うことになるといえるだろう。

者と死者(幽霊)とを線引きする絶対的な基準はない。生者のように死者(幽霊)は現れ、死者のように生者は現れうる⁶。だからおそらく問題の焦点は生者か死者かではない。問題は、「他者」の現れやそこに起こりうる出会いの経験を左右するような、何事かを時を隔てた〈呼びかけ〉として感受させる条件や社会的文脈のほうであるように思われる。タクシードライバーたちの場合には職業上の文脈から、非意識的な応答性において被災地という巨大な痕跡(=「窓」)からの〈呼びかけ〉に応える実践的な構えがあった。

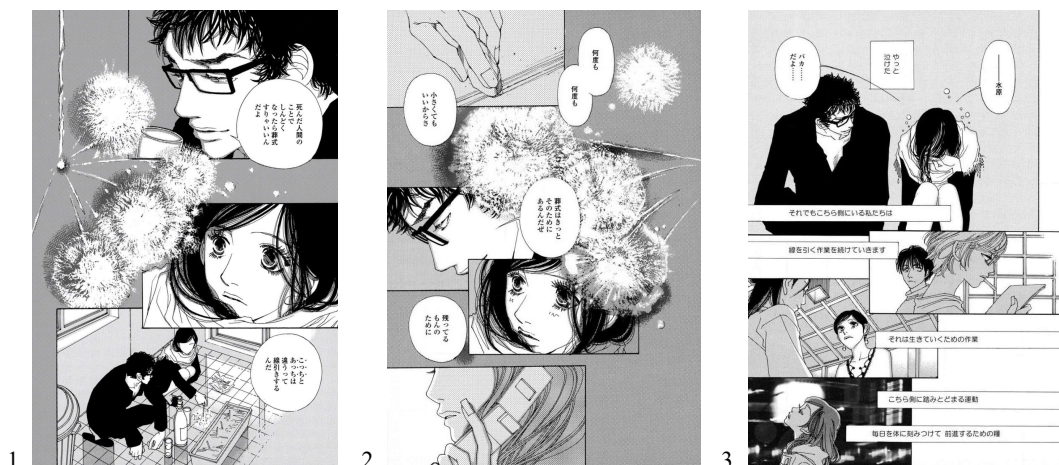
だとすれば、彼らが他者の現れを超えて、「出会い」の感覚に至れたのは、そうした日常的な応答性が、結果的には、あの女の子や青年の願いに時を隔てながら応えるという、不可能な〈呼びかけ〉とその一端において重なりあい触れあっていたということのようにも思われる。もし女の子や青年が(幽)霊であると気づかれなければ、つまり共時的な呼びかけと応答で済んでいれば、他者の「現れ」ではあっても、変わったお客さんの一人で終わり、その後が気になるといった「出会い」の感覚を構成するまでには至らなかったかもしれない。

もし「出会い」には時を隔てた〈呼びかけ〉と〈応答〉との意味上の重なりや触れあいが必要なのだとすれば、目前に他者が現れているにもかかわらず、その傷痕に触れ、何事かを時を隔てて応えようとのばされる手が、その人と出会おうとする身ぶりとして生きられうることに何がしかの意味があるといえるだろう。だが、それは何だろうか。なぜそうして出会うこととは、程度の差はあれ、相手のその後が気にかかることでありうるのだろうか。

(2) 何かが「ある」から、「いる」へ

ここまでの事物にのこる痕跡に関する議論を、身体のうちへと差し戻してみよう。私たちはタクシードライバーたちのように、被災地という巨大な痕跡(=「窓」)も、それに非意識的なレベルで呼応する実践の文脈をもたないが、にもかかわらず日常的に他者の現れを経験し、ときに出会いの感覚を生きることができている。だとすれば、代わりに、私たちにとっては他者の身体が何らか「特別な」痕跡としてあると考えてみてもよいだろう。

⁶ だからこそ、私たちの社会はそこに儀礼的な線引きをおこなうことを必要とするのかもしれない。おかざき真里「サプリ」(9巻、2009: 101-2、106)の以下のシーンはその由来を象徴しているように思われる。



ここで取り上げたいのは、医学生からジャーナリストに転身し、現在はフランスで3人目の女性ラビ（ユダヤ教聖職者）となったD. オルヴィールールの経験である。

彼女は、医学生だった当時、解剖学の理論学習を終えたあと、解剖教室にある解剖台に横たわるホルマリン漬けにされた検体——ひとりの女性の遺体——を用い、数週間にわたり臓器や筋肉、神経をひとつひとつ実際に解剖していくことになっていた。その当初の経験をオルヴィールールは次のように語っている。

おそらく、……恐怖や不安から距離を置くためだろう。わたしたちはそれらを完全な人体として見ることをやめ、各部分を別々の解剖学的単位として考え、注意深く観察した。重要なのは、できるだけ冷静に、すべてが細部にわたって覚えた教科書の内容と完全に一致することを確認することだった。（Horvilleur 2021=2022: 13）

解剖される遺体（検体）は、ここでは「いまここ」という共時性に限りなく切り詰められたものとして、つまり痕跡という隔時性の「窓」を一切ひらくことのない剥き出しの「物質性」において現れている。（前項でのタクシードライバーたちとは反対に）医学生としてはじめて人体を解剖するという文脈が、そこに非意識的に予感されている〈呼びかけ〉にむしる応じてしまうことを限りなく抑制する方向に働いているようにみえる。そうすることなしには、そこにメスを入れ、切り分け、観察することはできない。解剖台のうえにはひとりの女性が「いる」のではなく、遺体が「ある」のでなければならない。

よく知られるように、私たちは「～がいる」と「～がある」を使い分けており、一見その使い分けの基準はそれが生きているものか、生きていないものかであるように思われる。だが、死者が「いる」で受けられるように、生きているかどうかはその基準ではない。またたとえば、同じだれかの遺体であっても、家族にとっては「そこにお母さんがいる」という人称性のもとで経験されることもあるし、見知らぬ人にとっては「そこに遺体がある」という人称性の乏しさのなかで（つまり「物質性」に還元されるなかで）現れることもある。つまり、「いる」という経験は、私とその現れとのあいだに呼びかけと応答の関係を結びうるかにかかっているのだといえる。しかし、この場合の呼びかけと応答は、事態の共時的な水準だけでは成り立たない。典型的には、機械的な音声からの呼びかけがあり、それに反応することがあっても、私たちはそこに何かが「いる」という感覚、その「いる」ものに応えているという感覚は抱きづらい。人称性をもった何か（誰か）に応えているのではなく、たとえば目覚まし時計のベルを止めるように、物質的な——共時的な「ある」モノたちとの——道具連関のなかで作業している感覚に近いように思われる。しかし反対に、同じベルでもドアの呼び鈴は、呼んでいる「誰かがいる」という非意識的な応答感覚のなかですでに聴き取られる。物理的には同じ音でありながら、それを他者の訪れた痕跡という時を隔てた聴覚的な「窓」をひらく音として認識するかどうかによって、私たちが「そこに人がいる」という感覚を覚えるかどうかも左右されているように思われる（もちろん、呼び鈴も事物にのこる痕

跡であるため、実際にドアをあけてみたら、誰もいないということもある)。

だが、「そこに人がいる」という感覚が、(機械音声の例のように) 共時的な見かけ上の呼びかけと応答の関係には還元されることがなく、時を隔てた〈呼びかけ〉を必要とするのだとすれば、前者は失われ、後者も抑制された純粋に共時的な「物質性」の現れとしての検体に、再び人称性をあたえ、私にそこに何かが「いる」と感受される〈呼びかけ〉はありうるだろうか。オルヴィールは先述の解剖実習での続きを、次のように語っている。

ある日のこと、わたしたちは手の解剖学的構造を学び、靭帯や動脈、^{しゃっこつ}尺骨神経、尺骨動脈、屈筋を識別できることを確認する予定になっていた。数日前から解剖していた女性の遺体の右腕にかかった布をもちあげた時、わたしは吐き気に襲われた。科学のために献体したその女性の指先にある、おそらく死後も伸びつづけた爪が、きれいに磨かれ、そこに洗練されたピンクのマニキュアが塗られているのが目に入ったからである。おそらくマニキュアは死の直前に塗られたのだろう。……
[死が訪れた時] 最後の塗りはまだ乾く間もなかったようだ。その光景が目には浮かび、わたしの心はかき乱された。その時わたしは言語に絶する現実、異論の余地のない事実をまともに食らった気がした。……解剖される人体が、それぞれ男性と女性としての人生を語っている。その人生は……深い考えからなされた行為もあれば、大したことのない行為もあり、同じ一日のうちでもその時と場合によって選択がなされ、科学に貢献することもあれば、爪にマニキュアを塗ったりすることもあったのである。医大のその解剖室で、突然それまでと違った姿をわたしに見せたこの女性の指の上で、生と死はそっと触れ合った。(Horvilleur 2021=2022: 13-4)

オルヴィールは、すでに部分的に解剖のすすんだ検体——亡くなったからだ——の爪先に塗られた「ピンクのマニキュア」という痕跡を目にする。それまでは、「いまここ」の物質性において「ある」ものが、それがそれ自身の痕跡という「窓」をひらいた途端に、そこには人称性をもつひとりの女性が「いる」というまったく違う姿を現すことになる。

オルヴィールのもよおす吐き気は、だから、この検体にのこる痕跡という隔時的な〈呼びかけ〉への、すでに数日解剖していた女性への、取り返しのつかない「遅れ」への応答であるようにもみえる(〈呼びかけ〉は常に私の遅刻を意味している)。まるで時間をその身の内から巻き戻すような吐き気をもよおすほどの応答性において、ひとりの女性の時を隔てた〈呼びかけ〉は聴かれたのかもしれない。そこには、ひとりの女性が「いる」のだ、と。

しかし、だからといって、「窓」となる痕跡なるものが見いだせば何でもそれをもつ現れに対して、私たちは他者性(人称性)の感覚としての〈呼びかけ〉を感受するのかというと、そうではない。たとえば、コップに唇のかたちにかたに口紅の痕跡があっても、私たちはコップの現れに人称性を感じるわけではない。この場合の痕跡(口紅)は、世界内のいまは別のところにいる存在——そのコップをつかったひと——を指示するだけである。反対に、オル

ヴィルールの経験の場合は、いまここにある女性の遺体／物質性の現れのうえにのこる痕跡（爪のマニキュア）が指示するのは、その遺体の女性自身である。ここには、ある現れの一部がその現れ自身を指示する痕跡であるという矛盾が生じているように思われる。痕跡を通じて探され見出されるべき相手が、目の前に現れながら、みつからない。

しかし、オルヴィルールの経験はそれが矛盾ではないことを物語っている。それまでは物質的な現れだった遺体が、爪先のマニキュアという痕跡がひらく窓からの〈呼びかけ〉により、あたかも爪先を起点にして、その遺体の全域へとある女性の人生の物語の痕跡性を回復していくかのようなのである。その全身が「窓」として、「そこに人がいる」という感覚を覚えさせる（だからこそ、それがすでに解剖されていることに取り返しのつかなさを感じてしまう）。遺体の全身が、痕跡として、時を隔てた「窓」としてひらかれることで、そこに人称性が、他者という現れが生起する。その限りでは、他者とは、いつもすでにそれ自身の痕跡である。他者がそれ自身の痕跡によって指し示すのは、だから世界の内部ではなく、世界の外部である。他者はその隔時的な「窓」を通じて世界の彼方（外部）から到来する何者かである。私たちがもつ「そこに人がいる」という感覚とは、より正確には、他者の身体という「窓」に、「人が（到来して）いる」という感覚にほかならない。

たとえば、目の前に図2のような外部から押しくぼめられた壁がみえるところとしよう。私たちは世界のこちら側からのこされた痕跡であれば、それをのこした者はここにいないと判断できるが、私の世界の外部からこの世界にのこされた痕跡＝「窓」はまだその向こうにそれをのこした者がいるのか、いないのかを判断できない。まだいるのかもしれないし、いないのかもしれない。私たちはこのいるのかいないのかわからない外部（彼方）からの痕跡そのものに、むしろ他者の到来する「窓」を、他性の現れを、〈呼びかけ〉を経験するのである。

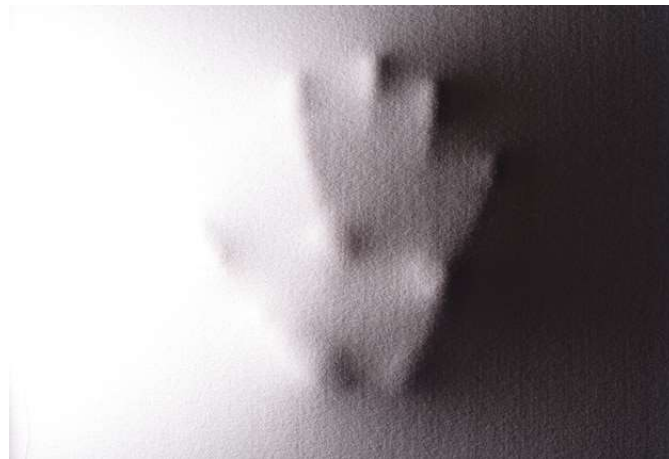


図2 世界の外部からの痕跡⁷

けれども先に述べたように、他者の全身が痕跡という時を隔てた「窓」であるということ

⁷ “Human hand pressing through fabric as horror background” designed by freepik.com（最終閲覧、2023年4月3日：https://www.freepik.com/premium-photo/_8043515.htm）

は、逆説的に、それが「窓」であることを忘れさせることでもあるだろう（局所的ではなく、全身が窓であるなら、窓枠や縁どりでもない限り、ないのと同じである）。実際、私たちは普段、共時的なコミュニケーションが可能な、生きている他者の現れにあって、とりたてて「窓」を感じることはない。他者が「窓」において彼方から「現れながら」不在であるという痕跡の形式であると感じることがない。しかし「窓」はなくなったわけではない。私たちがそこに他者が「(到来して) いる」と感じる限りでは、非意識的な応答性において隔時的な〈呼びかけ〉を聴いている。しかし、それは現在の意識においては主題化されることがない。意識が捉える共時的な「物質性」のヴェールのうしろに時を隔てた「窓」は隠されているかのようなのである。だとすれば、傷痕とは、そうしたヴェールの破れにあって露出した、他者がそこに彼方から到来していることを告げる「窓」なのだといえるように思われる。しかし、そこに時を隔ててのばされる手は何を意味しているのだろうか。

4. もうひとつの隔時性、あるいは消えゆく他者という痕跡

共時的な「呼びかけ」と「応答」はそれだけでは成り立たず、他者とは絶えずそれに先行する世界の外部からの痕跡としての〈呼びかけ〉をもってはじめて「いる」という人称性を随伴し現れていた。その限りでは、他者とは本来、共時的ないまここへと現れている、が同時に痕跡としていまここではない私とは隔てられた時間にいる、というピントの定まらない二重写しのようなものとして経験されても不思議ではない。けれども、そうになっていないのは、おそらく私たちが普段、この時間的な二重写しの他者の現れを強力な志向性の作用によって「いまここ」へと共時化（同化）し、他者との時間の隔たり＝「窓」を隠蔽しているためである。だから、このヴェールの破れに露出する傷痕が他者を再び二重化させる。実際、傷痕に触れるとき、私のまなざしは、少なからず他者の姿をその近さと同時に遠さのうちにみているように思われる。だがこのとき、いまこの他者に重ね写しにみられている「窓」の向こうにいる他者と私との、時間の隔たりの意味とは何だろうか。

オルヴィールは、女性の遺体にのこる痕跡を起点にいまはもうこの世界にはいない生前の——「過ぎ去った」彼方の——女性を重ねみている。仮にこれを反転するなら、生きている他者のからだの傷痕という「窓」から、私がそこに重ねみるのは、その他者の死というもうひとつの絶対的な隔たりとしての未来なのかもしれない。他者の傷痕は、すでに失われたものだけでなく、私との隔てられた時間性において、どこか他者そのものが失われ、解体してゆく未来を先取りしている。他者の傷痕に触れた手がうけとるあの不在の感覚は、取り返しのつかない他者の未来とのあいだにある絶対的な隔たりを意味している。そう仮定すれば、傷痕とは過去の痕跡であると同時に、不在となった他者の未来の痕跡としてある。それゆえに、そこに触れる手は、その傷痕に相手の不在を、死を、「時を隔てて」すでにうけとっているかのように、それに応えようとするかのようにのばされているように思える。

実際、他者が死にゆく（不在になりゆく）過程でもまた、しばしば（傷痕がそうするのと

同じように) 志向性による時間的な隔たりの隠蔽の破綻が経験され、他者の現れが二重化する。そこで他の他者のからだに手を触れるという出来事を、森岡正博による脳死状態の患者と家族のあいだの経験の記述にもとめてみよう(森岡 2001)。

森岡は、脳死の人を前にしたときの家族の反応は多様であり、それぞれ尊重されなければならないとしたうえで、大きく3つにわけている。「(1) 脳死の人は死体になったと受けとめる人々」「(2) 脳死の人は疑いもなくありありと生きていると受けとめる人々」「(3) 脳死の人は意識がないからその人はもうここにはいないと頭では理解していても、実感レベルではまだその人がそこにありありと現れているとしか感じられない人々」、である。そして森岡は、(前述の小松による「密着的不在」にふれながら)、こうした脳死状態の患者をもつ家族が経験する他者の現れに即した4つの類型を提示する。整理すれば以下になる。

「実在」：そこにいるはずのひとが、いまここにいる(いるべきものがそこにいる)

「非在」：そこにはいないはずのひとが、そこにはいない(いないはずのものがそこにはいない)

「現前」：すでにいないはずのひとが、いまここにいる(いないはずのものがそこにはいる)

「不在」：いまここにはいるはずのひとが、そこにはいない(いるはずのものがそこにはいない)

(森岡 2001: 78-81 参照)

森岡によれば、これらは揺らぎのなかで生きられており、とりわけ「現前」と「不在」の場合には、目の前の出来事をどのように解釈してよいのか、家族は戸惑うことになる。ときには「みずからの感じたリアリティを隠蔽して、『死んでいるものは死んでいるのだ』とか『生きているものは生きているのだ』など」と自分に言い聞かせてみずからを欺き、「『現前』や『不在』として到来した他者から、固く目を閉ざしてしまうことになる」(森岡 2001: 88)。

こうした揺れ動きの事例として森岡は、ドナーカードをもっていた17歳の娘を交通事故による脳死で亡くした両親の体験(中日新聞 1999、以下引用では別書体)を引きながら、あえて分析的に上記の4つの経過を次のようにたどっている。

まず、娘が病院に運び込まれ、母親が駆けつけたとき、すでに娘には意識がなく、瞳孔も開き、人工呼吸器だけで息をしている状態だった。母親はそのときのことをこう語る。

「真理ちゃん、こんなところで何やっとなる。はよ起きんか。いつまで寝てるの。帰るよ。抱きついて、手を握っても、あんなに明るく元気だった真理が……。これ真理ちゃんじゃない。

ここにあるのは、そこにはいるはずのひとが、目の前の身体のどこにも現れていないという「不在」。

脳死についての説明を聞いたとき、母親は思う。

もちろん頭では分かったつもりだった。でも、わが子だもん、理屈は全部飛んじゃう。心臓動いとるなら、いくら麻酔してもらっても痛いんじゃないか、とか。18年前に苦しんで産んだ命、私が断つのかって、あれこれ考えましたよ。

ここにあるのは、すでにいないはずのひとが、それにもかかわらず、目の前に命をもって現れているという「現前」だ。

臨床的な脳死診断を行なうときに、父親は娘に向かってこう語りかける。

「頑張ったからもういいよ、真理。おやすみ。パパがおんぶしてやるから帰るぞ。お父さんは胸の上、心臓のあたりにそっと手を置いて、声を掛けました。

父親は、脳死を人の死だとは思っていない。臨床的な脳死診断のときにも、そこに存在するはずの娘に向かって、躊躇なく声を掛けている。ここにあるのは、そこにいないはずのひとが、そこにいるという「実在」だ。

母親は、脳死を頭では理解しているが、実感としては受け入れていない。その母親が、臨床的な脳死診断のときに、次のような体験をしている。

でも、足に触ったとき、くるぶしの青い血管がスーッと透明になるのが見えたんです。その時なぜか、ああ、いま天国に行ったんだなあって一瞬だけ感じました。

母親は、このとき、娘がほんとうになくなったという実感を、一瞬だけ感じ取っている。そこにいないはずのひとが、ほんとうに目の前からなくなったという体験だ。これは「非在」と言ってもいいだろう。

葬儀が終わったあと、母親は仏壇に置いた携帯電話を毎日眺めている。

鳴るはずのない携帯をじーっと見ていると、ピロロロって、「今から会いに行くからね、お母さん」って言葉が聞こえそうで。真理がそこにいるような気になるんです。……仏壇のろうそくの炎が時々、ぽぽぽぽって揺らぐんです。ああ、真理ちゃん、そこで聞いてるんだね。……これでよかったんだよね。……真理ちゃん。

遺体が焼かれたあとも、すでにいないはずの娘は、携帯やろうそくの炎のうえに、ありありと現れてくる。「現前」である。(森岡 2001: 92-4)

こうした脳死状態にある患者を看取る家族に現れる他者の揺れ動きと、傷痕に触れるこ

とを通して現れる他者の揺れ動き（二重写し）とは、もちろん安易に同列に扱うことができるものではない。私たちは、しかし、こうした揺れ動きがありうるということの可能性の条件を考えることはできる。通常私たちは、「実在（いるものはいる）」や「非在（いないものはいない）」が先で、その破綻として「現前」や「不在」が起こると考えがちである。だがそうだろうか。痕跡、あるいは他者の傷痕というささいなほころびにあってさえ、いまここという私の時間には回収できない隔てられた時間をそこにみてしまう。そうであれば、事態は逆であり、「現前」や「不在」が他者の訪れの本来的な形式としてまずあり、その捻じれを私たちは絶えず志向性の働きによって共時化し隠蔽しており、傷痕や痕跡——脳死状態の患者のからだはしばしば家族にとって「抜け殻」として経験される——が、この隠蔽を破るのだと考える必要がある。

他者とはだから、本来的に私の世界に「現れながら」不在である、そのような形式で訪れている。確かに、「いまここ」に他者は現れ、共時的にコミュニケーションをとれる。しかし、そのからだの傷痕という「窓」には、私の現在とは絶対的に隔たれた時間、したがって「いまここ」には（もう／まだ）いないその他者との関係が、死（不在）に向かう他者の弱さとの関係が、意味されていないだろうか。そう考えるとすれば、事物にのこる痕跡が「過ぎ去った」他者の面影を映すのとは対称的に、傷痕という「窓」の向こうには誰がいるのかわからないという矛盾は少しばかり了解可能かもしれない。「窓」の向こうにいるのはその他者の、いまだいちどもみたことのない姿（死する顔）だからである。

実際、私たちが他者の傷痕に手を触れるそのとき、私と同じ時間にはいない影のさした他者の弱さの表情が、「いまここ」の志向性に捉えられる他者の表情に、一瞬二重写しのように仄見えるときがあるように思われる⁸。そして、あたかもそうした弱さを知っているかの

⁸ わたしだけの経験かもしれないが、傷痕に触れ、その他者がいまここにはいないのではないかという不在さを垣間見るとき、その同じ顔にまるで私とは別の時間の流れにある人の顔のように影がさし、もうすでにいなくなってしまった「あなた」という存在の痕跡のようにみえる一瞬がある（幽霊のようにみえるといえれば言い過ぎかもしれないが、遠い過去のもののようにみえる、あるいは遠い未来のもののような、少なくとも私と同じ時間にある人間の顔ではないようにみえる、あるいはそういうイメージないしプログラムが眼前で明滅する一瞬がある）。こうした「現れながら」不在である他者を、つまり痕跡としての他者を、あるいは不在の他者を視覚的に表象する作品が、おそらく上述した二重写しのような構図や隔たりの構図をとることは一定の意味があることのように思われる（図3、写真引用元は文献欄参照）。こうした事態は、私の意識に働く共時化の力を減じてはじめてみえてくる他者の姿である。



図3 C・ポルトンスキー（1996）《Véroniques》〔左〕、松田壯統（2019）《Ilya》〔右〕

ように、他者の傷痕——隔てられた時間——に触れようとする私の手もまた、共時化への回収の力を極力減じた私の弱さ（可傷性）においてある。しかしなお、傷痕は、私の手の共時化を拒むというまさにその仕方において、時間的に私とあなたが隔てられながら「出会っている」という事態に出遭わせるのだといえるだろう。

5. おわりに——他者の傷痕における“呼びかけ”と“応答”

私たちは時間に触れることはできない。触れられるのは、時間の「形象」、あるいは時間の「隔たり」だけである。そのひとつが傷痕や痕跡であり、いずれも、相手との再会や出会いを望む人が、触れようと不思議と手をのばす「(時を隔てた)窓」である(再会や出会いを望まない人や、置かれた社会的文脈によっては「窓」はみえず、たんにいまここの物質性のうちにある)。

事物にのこる痕跡という窓は、「不在の他者(死者)」との極限的な近さととてつもない遠さとともに、ときに鳴りやまない着信(感情)として私に呼びかけたり、その願いに応えようとする者には見知らぬ関係であっても、その姿を(幽霊として)現わすこともある。また遺体(検体)にのこる生前の痕跡は、それが窓としてひらかれると、「遺体がある」ではなく「そこに人がいる」という人称性の感覚をその全域に回復させる起点でもあった。いずれも、死者が私の世界の外部から時を隔てた「窓」を通じてそこに到来する事例だが、逆説的にそれは、共時的なレベルでの社会的コミュニケーションにいつもすでに先行する「他者の現れ」それ自体を可能にする構造の再演として理解することができる。

目の前にそのひとが生きている場合でも、他者の現れは、常にそれ自身を痕跡＝「窓」としていた。それは世界の外部からのこされた痕跡であり、「現れながら」不在であるものとして、私たちは共時性(物質性)のヴェールによりこれを隠蔽しているのである。

だが、他者の傷痕は、そうした「いまここ」のヴェールの破れとしてひらかれる「窓」として、それ自体が私の現在に回収できない時間、絶対的に隔てられた時間において他者が先立っていることを(外傷的に)暗示し、強迫する。しかし、そこに触れようとする私の身ぶりは、この遅れを取り戻そうとする「愛撫」(Lévinas 1961=2005)の手ではない。他者のからだの傷痕に触れる手は、すでに述べたように共時化の断念のうちであり、それゆえ非意識的な応答性において感受される未来において、「そのとき、あなたのそばにいれなかった」咎を、その限りでは私に「過失はない」にもかかわらず赦されようとのばされているようにも思える。それは「手の贈与」の身ぶりであり、その手によって時を隔てて「身代わり」になろうとしているようにもみえる。

だとすれば、わたしの乏しいレヴィナス理解においてではあるが、他者のからだの傷痕に触れようとするとは、ひとつの「存在の彼方」の痕跡——<顔>——との出会いの経験なのではないだろうか(Lévinas 1978=1999)。本稿における「他者の傷痕(痕跡)に触れる」という経験的なレベルでの論述がレヴィナス理解に資することは何もないかもしれないが、

少なくとも他者とのあいだのこうした隔時的な〈呼びかけ〉と〈応答〉をめぐる構造に裏打ちされることで、私たちは共時的な水準でも呼びかけられたら、応えるという責任や（他者のその後への）約束をそれとして営むことができているようにも思われる⁹。

もしこの構造をレヴィナスが「社会性の秘密」と呼んだのだとすれば、本稿は、これをどのように社会学における経験的な記述のなかに据え、展開していくことができるかのささやかな切り結びの試みだったといえるかもしれない。

文献

- Auster, Paul, 2012, *Winter journal*. New York: Henry Holt and Co. (柴田元幸訳、2017、『冬の日誌』新潮社).
- Boltanski, Christian, 1996, 《Véroniques》／国立新美術館・国立国際美術館・長崎県美術館編『クリスチャン・ボルタンスキー -Lifetime』、2019年、水星社（同図録 p.175 の作品展示写真より部分引用）.
- Horvilleur, Delphine, 2021, *Vivre avec nos morts: Petit traité de consolation*, Paris: Grasset. (白井美子訳、2022、『死者と生きる』早川書房).
- 石橋潔、2022、「危篤のときの対面：その理論的考察」第95回日本社会学会大会要旨.
- 伊藤亜紗、2020、『手の倫理』講談社.
- 金菱清（ゼミナール）編、2016、『呼び覚まされる霊性の震災学』新曜社.
- 河合俊雄・赤坂憲雄、2014、『遠野物語：遭遇と鎮魂』岩浪書店.
- 河村直哉・中北幸家族、1999、『百合：亡き人の居場所、希望のありか』国際通信社.
- 小松美彦、1996、『死は共鳴する：脳死・臓器移植の深みへ』勁草書房.
- Lévinas, Emmanuel, 1982, *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger: Suivi d'Essais nouveaux*. Paris: Vrin. (Slatman 2016 における引用内引用)
- 、1961, *Totalité et infini. Essai sur l'extériorité*, La Haye: Martinus Nijhoff. (熊野純彦訳、2005、『全体性と無限（上）（下）』岩浪書店).
- 、1978, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, La Haye: Martinus Nijhoff. (合田正人訳、1999、『存在の

⁹ もちろん、レヴィナスの議論が他者への過重な責任や罪責感を課されている点（吉永 2016）を社会的・経験的なレベルでどう考えるべきかは重要である。たとえば家族の危篤の知らせにおいて、「いかなきゃ」と私たちに思わせるものは何だろうか。この問題をめぐるレヴィナス的な理解と、社会的な理解の出発点はおそらく大きく異なるだろう。だが、家族が危篤の知らせを聞いたとき、当然のごとく遠隔的なコミュニケーション・テクノロジーによっては代替できない場面として感じられるが、なぜ「対面」でなければだめなのだろうか（石橋 2022）。なぜ死にゆく大切な人の身体は、私を〈呼ぶ〉のだろうか。私はいつから〈呼ばれて〉いたのだろうか。ほんとうはずっと前から〈呼ばれて〉いたのに、それに気づき応える機会がこの最期のときになってしまったかのように、その遅延を取り戻そうとするかのように、どうしてか「いかなきゃ」と思う。大切な人であればあるほど、そう思う。でなければ、ずっとその〈顔〉に先取りされていた隔時性の（不在の）他者のほうがいよいよ現実化し、その〈呼びかけ〉にかろうじて応える術を永遠に失ってしまうかのように、である。

無力ながらも他者の死に立ち向かいながら、死という絶対の極限において《他者をひとりにさせないこと》、それは、私を召喚する要求に対し「われここに」(me voici) と答えることにすぎないかもしれない。しかしそれこそが、おそらくは、社会性の秘密なのであり、無償性と虚しさの極みにおける隣人への愛、肉欲なき愛なのである。(Lévinas1991=1993: 186)

彼方へ』講談社)。

——, 1991, *Entre nous: essais sur le penser-à-l'aure*, Paris: Grasset. (合田正人・谷口博人訳、1993、『われわれのあいだで』法政大学出版局)。

松田壯統、2019、『Ilya』「セレブレーション：日本ポーランド現代美術展」(2019年、京都芸術センター展示風景)、写真引用元：Masanori Matsuda HP (最終閲覧：2023年8月24日：<https://masanorimatsuda.net/ilya.html>)。

Merleau-Ponty, M, 1945, *La phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard. (1967・1974、竹内芳郎ほか訳『知覚の現象学 1・2』みすず書房)。

みやざき明日香、2018、『強迫性障害です！』星和書店。

森岡正博、2001、『生命学に何ができるか：脳死・フェミニズム・優生思想』勁草書房。

おかざき真里、2009、『サブリ (9)』祥伝社。

Sartre, J. P, 1937, “La Transcendance de l’Ego: Esquisse d’une Description phénoménologiques,” in *Recherches philosophiques*, 6. (竹内芳郎訳、2000、『自我の超越』『自我の超越・情動論粗描』人文書院、20-86)。

澤田唯人、2020、『かつて、あの人は、ここにいた』：他者の生の痕跡に触れる」岡原正幸編『アート・ライフ・社会学：エンパワーするアートベース・リサーチ』晃洋書房。

Slatman, Jenny, 2016, “Is It Possible to “Incorporate” a Scar?: Revisiting a Basic Concept in Phenomenology” in *Human Studies* 39, 347-363.

中日新聞、1999、「娘が脳死になった：17歳ドナーの真実」(1999年10月14-18日朝刊)。

吉永和加、2016、『〈他者〉の逆説：レヴィナスとデリダの狭き道』ナカニシヤ出版。

(さわだただと・慶應義塾大学)

